

「徐福伝説」から「茶」(CHA)の文化へ

日本国・堺市 前田秀一

1. はじめに — 連雲港市との「市民交流」への取り組み

「堺」には、旧石器時代(約1万年前)より人が住み、縄文時代(紀元前1,000年)には、四ツ池遺跡などに集落が形成され、弥生時代(紀元前3世紀)には大規模な集落が出現して、水耕稲作がおこなわれ銅鐸や銅製の矢じりなど金属器の使用が考証されている^{1)、2)、3)、4)}。

4世紀末から6世紀後半にかけては、全国的にも屈指の規模を誇る112基の古墳が築かれ、仁徳陵など巨大な前方後円墳の周りには、陪塚と呼ばれる規模の小さな前方後円墳や円墳、方墳などが存在する百舌鳥古墳群が築造され古墳文化が栄えていた⁵⁾。

特に、仁徳陵はその大きさにおいて、常に、秦の始皇帝陵およびエジプトのクフ王のピラミッドと並んで世界の三巨大陵墓として比較されるほどに日本では最大の古墳である。建設会社「大林組」の調査⁶⁾によると、当時、仁徳陵築造に要した労力は、1日2,000人×15年8ヶ月=のべ約680万人、これら労働者の食糧や道具を確保するためにもっと多くの人々が働き、食糧(米)や道具などの大量生産技術が整っていたことが推定されている。この巨大古墳の築造のためは、新たな測量・土木技術や製鉄技術など専門職種の渡来人集団が深く関わっており、そうした先進的な技術集団を掌握することが政権維持のためにも不可欠であったと考えられている⁷⁾。



百舌鳥古墳群 『堺市勢要覧「堺NOW」2004』¹⁾より

2003年、堺市と連雲港市が友好都市提携以来20周年を迎えることを知った。

私が所属する市民活動団体「堺なんや衆」(堺の文化の再発見、堺の魅力の再生・創造、堺の魅力情報発信を活動の目的とする研究団体)では、この機会を活かして両市がこれまでに培ってきた友好の絆を軸に、さらに、相互に郷土に関わる文化を共通のテーマとして市民の参加による交流のあり方を考えて堺市および堺日中友好協会に企画提案する活動に取り組んだ。



「中国文化セミナー“徐福”」2003年 堺商工会議所

情報収集と議論の中から、日本の弥生時代に水耕稲作、機織り手工業、医薬、漁労や金属鑄造技術など日本の弥生文化の成立に貢献したと伝承されている秦の始皇帝の方士“徐福”が、友好都市・連雲港市に生誕し、中国では歴史的事実として考証されていることが判った。

「堺の弥生文化の成立と徐福伝説」をテーマとして、両市市民はもとより、日本全国約30箇所と言われている「徐福伝説」に関わりのある郷土研究者の方々にご参加いただき、相互交流する「機会」と「場」を提供することを趣旨とした企画書を提出した。

堺市(国際課)および堺日中友好協会では、市民協働提案として受理され、2003年10月24日、堺商工会議所に、連雲港市から連雲港市市長・劉永忠先生をはじめ、連雲港市徐福研究所所長・張良群先生など総勢13名がご参加いただき、日本国内から約200名の方々が参加されて「中国文

化セミナー“徐福”と題したシンポジウムを開催した⁸⁾。

張良群先生には「“徐福”日中友好の先祖」と題して基調講演をお願いし、それを受けて、作家・翻訳家の池上正治先生に「弥生時代の使者・徐福が伝えたこと」を、さらに堺市博物館・館長の角山 榮先生には「徐福が求めた不老長寿の仙薬とは」についてご講演いただいた。

2. 「徐福伝説」への取り組み

徐福伝説との出会いは、堺市が、1983年12月3日に連雲港市と友好都市提携し、2003年が、20周年の記念の年であることを知ったことがきっかけとなった。それは、連雲港市という名前を聞いて、直ちに「徐福伝説」を想起したと言う意味ではない。

むしろ、堺の友好都市として「連雲港市」という名前を聞いても、それが中国の何処にある都市の名前かも知らず、堺市民でありながら友好提携して20年も経過していることすら知らなかったことへの反省から、友好都市・連雲港市にはどのような文化がある都市だろうかという好奇心につながって調べ始めたことによる。

その結果として、池上正治先生の編訳書⁹⁾に出会い、達 志保先生の著作¹⁰⁾ および朝鮮半島の徐福伝説に詳しい石川幸子先生との出会いへと発展していった。そして、ご紹介を受けて、新宮市に（財）新宮徐福協会・奥野利雄参与を訪ね、また、佐賀市に佐賀県徐福会・村岡央麻副会長を訪ねし、徐福研究者・内藤大典先生（生前：2003年）をご紹介受けた。

これを機会として、沖縄から青森まで、日本国内約30箇所にわたる伝承地の皆さんをご紹介をいただくこととなり、結果として、日本全国の24人の方々と直接的な交流へと発展し、改めて、「徐福伝説」の持つ「人の和」をつなぐ“力”を実感した。

この“力”が、「徐福」が伝える友好の絆の根源であることを実感する中で、生前、故内藤大典先生から、「海の都市文明」を標榜する堺にも、どこかに、徐福船団の一部が上陸したかもしれないと、あらゆる故事、遺跡に注目し、夢を持って調査するようにご助言をいただいた。しかし、永年うわさすらない堺において如何にこのテーマを市民の間につなぎ通すかということは簡単なことではなかった。

池上正治先生からは、古墳文化が栄え、大和王権下において交通の要所であった堺には、多くの渡来文化があるはずであり、「渡来人の文化」と言う視点を持つてはどうかと具体的にご提案をいただき、協働して「関西（大坂、京都、奈良）における“秦氏”調査」に取り組み、その結果を連雲港市カン楡県第5回「徐福国際学術研討会」（発表要旨校閲：池上正治先生）にて発表させていただいた¹¹⁾。

恐らく、連雲港市内で、堺の古墳文化に関する発表（通訳：連雲港市外事弁公室・陳珍文先生）として最初の機会であったと思うが、参加者からは大きな反響をいただいた。

3. 「茶」（CHA）の文化」への展開

2003年、「中国文化セミナー“徐福”」で「徐福が求めた不老長寿の仙薬とは」についてご講演いただいた堺市博物館・館長・角山 榮先生（当時）のお話の内容は、仮説としてお断りはあったが、これまでにないユニークな切り口を提言され、日本の各地から来られた参加者に大変大きな関心と興味を呼び起こした¹²⁾。

「不老長寿の仙薬」とは、先ず、古代中国において仙薬の主成分として知られ、常飲すれば、若さを取り戻し不老不死になると考えられていた朱色の「辰砂（しんしゃ：硫化水銀）」ではなかったかと述べられた。日本では、縄文時代から人を埋葬する時に使用され、古墳時代の初期には、棺の中の死体に、いつまでも生前の姿を残すために辰砂が塗られていた。

徐福が訪れた地域として、「丹生」、「丹生神社」、「丹生川」、「丹南」など、現在も、なお、辰砂につながる地名が残っている近畿地方について言及された。これは、徐福が神武天皇であったとする仮説に繋がり、その探し求めた道中として熊野、新宮という地名も挙げられた。

一方、不老長寿の仙薬探しは、中国では、始皇帝以後も続けられ、12世紀末の宋の時代に日本から留学した栄西が、臨済宗を伝えると同時に「茶」をもたらし1211年に著した『喫茶養生記』において、「茶は養生の仙薬にして延命の妙術なり」、「人倫これを採れば、その人長命なり」と冒頭に述べていることに注目され、始皇帝が永らく求めていた仙薬は、それは実は身近な日常生活で人々が飲んでいるお茶であったと提唱された。

12世紀の末に栄西により不老長寿の仙薬という物質文明として日本にもたらされた「茶」は、16世紀に入って、堺の商人・千利休により「茶の湯」の文化として大成され、日本文化の規範となる精神文化として確立された。

お茶に招き、招かれる人と人との「ふれあい」Communication、「もてなし」Hospitalityを通じて「人間の信頼関係を形成」Associateする精神文化として大成し、「茶（CHA）の心」は、「一期一会」、「和敬清寂」で表現される平和に通じる哲学であると説かれた。



武者小路千家茶席「伸庵」 堺市・大仙公園

「一期一会」

茶会を一生に一度の出会いの場ととらえ、相手に誠意を尽くすころ

「和敬清寂」

お互いに心を開いて仲良く、敬いあい、心を清らかにして、どんなときにも動じないころ

現代では、不老長寿の仙薬は、もはや、皇帝一人の権力を維持するためのものではなく、中国13億の民、日本1億2000万人の民のものであって、しかも、堺の茶人・千利久の哲学の教えのとおり日中友好と繁栄によりアジアの平和に貢献しなければならないと結ばれ、参加者に「徐福」の使命の展開として新たな平和の理念「茶（CHA）の心」を提言され大きな感銘を与えられた。

4. まとめ — 今後、市民交流のテーマとして取組んでいきたいこと

友好都市・連雲港市に生誕し、中国で歴史的事実として考証されている「徐福」に関わる伝説は、残念ながら伝承地ではない堺では抽象論に終始し、具体性に結びつくところがなく、市民交流のテーマとしては盛り上がりには欠け、取組むには難しい。

特に、今後の市民交流テーマとして視点を置いた場合、弥生時代に遡って日本の文化の成立に貢献した徐福伝説の持つ精神を活かした取り組みは、現代において共通する相互の郷土文化を上げることでその任は十分に果たすことが出来ると考える。

中国本土での「茶文化」は、現在の四川省・巴蜀に始まり歴史は古いが、日常的な「茶文化」という用語の使用は1980年代ごろから始まり、まだその歴史は浅いと言われている¹³⁾。

「茶文化」の合意として、茶の採摘、加工、販売、飲用、政策、喫茶習俗、喫茶心理など、つまり人間が茶を利用するあらゆる面を含むが、広義には、茶の栽培、日常の喫茶など茶に関する全てのことを、狭義には、日常の喫茶の上に生れる茶の作法、茶の芸術性、喫茶の思想や精神世界などを指している。

連雲港市には、銘茶「雲霧茶」や陸羽賞を受賞した「徐福茶」などブランド品を産出する茶

畑があるが、堺には茶の畑はない。しかし、16世紀に、堺の茶人・千利休によって大成され、日本の文化として、芸術として、道として、哲学として、宗教に根ざした道德観として規範となっている「茶の湯」の文化があり、また、今日、前堺市博物館・館長角山 榮先生によって提唱された「ふれあい」と「もてなし」の心で「人間関係を形成して」行くと説かれた「CHAの心」の理念に基づく文化が現代に生きる新たな哲学として見直され、幅広く受け入れられている¹⁴⁾、¹⁵⁾。

「茶文化」の概念において、堺市と連雲港市は、相互に立場を違えているが、逆に考えれば相互に補いあえる間柄にあることを示唆しているとも言える。

形にはまった精神文化としてではなく、日常的な“ふれあい”と“もてなし”の心を持って相互により良い“人間関係を形成”することにより、堺市と連雲港市の市民交流の底辺が拡大し本来的な友好交流のあり方に帰結することが出来れば、その成果は、まさしく、中国文明を河川文明から海洋文明に転換し、日本との友好交流の“祖”として役目を果たした「徐福」の精神に合致すると考え、ここに、「茶」(CHA)の文化を両市市民交流のテーマとして提案したいと考える。



堺発 “もてなし”茶(CHA)会ー「花見」野点席
ヘルマン・ハーブ演奏(けやき通りまちづくりの会)

5. 謝辞

本稿の投稿を熱心にお勧めいただいた連雲港市徐福研究所所長・張良群先生および通訳兼翻訳の任を請け負って支えていただいた徐廣影先生、そして、本稿の中国語翻訳に携わっていただいた方々に厚く御礼申し上げます。

また、本稿の投稿にあたり原稿をご校閲賜りました前堺市博物館長・角山 榮先生と中国語翻訳原稿をご校閲賜りました作家・池上正治先生に厚く御礼申し上げます。

本稿脱稿の日・2008年5月20日、佐賀県徐福会会長・村岡央麻様から故内藤大典先生の遺稿書『吉野ヶ里と徐福ー佐賀平野で始まった弥生文化ー』をお届けいただいた。奇しきご縁を感じる玉書である。書状に「・・・交友のあった方々に・・・」とあった。改めて、村岡様のご配慮に感謝し、故内藤大典先生のご冥福をお祈り申し上げます。

最後になりにりましたが、本稿の投稿をお許しいただいた堺日中友好協会会長・曾我部篤爾様、堺市・国際部部長・溝口勝美様および国際課課長・坪井弘和様、さらに、市民活動団体“堺なんや衆”理事長・岡田明寛様に深く感謝申し上げます。

6. 引用文献

- 1) 堺市市長公室広報課；『堺市「市勢要覧」(堺 NOW) 2004』、6頁(2004年3月)
- 2) 堺市立埋蔵文化財センター；『四ツ池遺跡』弥生時代編 堺の遺跡ガイドシリーズ3』(堺市教育委員会、2002年)
- 3) 堺市立埋蔵文化財センター；「弥生時代の四つ池のようす」堺市行政資料番号 3-L3-98-0007 (1998年4月1日)
- 4) 大阪府弥生文化博物館；『弥生創世記 - 検証：縄文文化から弥生文化へ』(2000年4月12日)
- 5) 堺市史長公室広報課；ホームページ「百舌鳥古墳群の概要」

<http://www.city.sakai.osaka.jp/city/rekibun/mozu/introduction.html>

- 6) 林 章 [(株) 大林組]; 『フォーラム堺学』、7頁 [(財) 堺都市政策研究所、1996年]
- 7) 大阪府弥生博物館; 『大和王権と渡来人 - 3・4世紀の倭人社会』(2004年10月5日)
- 8) 市民活動団体“堺なんや衆”; 『中国文化セミナー“徐福”』(2004年)
- 9) 池上正治編訳; 『不老を夢見た徐福と始皇帝』(勉誠社、1999年)
- 10) 達 志保; 『徐福論—いまを生きる伝説』(新典社、2004年)

<http://www.h4.dion.ne.jp/~js.maeda/johukutujisiho.htm#nazeima>

- 11) 前田秀一; 「関西(大坂、京都、奈良)における“秦氏”調査」、連雲港市カン楡県 第5回「徐福国際学術研究会」(2005年10月1日)

<http://www.h4.dion.ne.jp/~js.maeda/johukukanyuken.htm>

- 12) 角山 榮; 「徐福が求めた不老長寿の仙薬とは」、『中国文化セミナー“徐福”』、59頁(市民活動団体“堺なんや衆”、2003年)
- 13) 趙 方任; 『茶詩に見える中国茶文化の変遷』(シンクシステム開発、2004年)
- 14) 角山 榮; 『茶ともてなしの文化』(NTT出版、2005年)
- 15) NPO 法人南大阪地域大学コンソーシアム;
堺市教育情報ネットワーク「茶の湯からCHA文化へ」<http://cha.sakai.ed.jp/index.html>